

学生による地域活性化 プログラムの展開 (平成24年度)



平成24年度取組一覧

まちの駅ネットワークみつけの情報発信と地域への影響調査	鯉江康正ゼミ
グラスルーツグローバルイゼーション ー草の根・地域からの地球一体化推進ー	広田秀樹ゼミ
バランス・スコアカードによる環境経営	吉盛一郎ゼミ
セーフコミュニティの可能性 ーいのちを大切にすまちづくりー	菊池いづみゼミ
地域の魅力発信による絆結び ー神谷の魅力を知り・伝え・つなげるー	高橋治道ゼミ
十分杯の広報活動	権五景ゼミ
企業の情報発信とホームページの役	村山光博ゼミ

長岡大学ブックレット刊行にあたって



平成25年6月
長岡大学長 内藤 敏樹

私は、平成24（2012）年4月に、長岡大学の第3代学長に就任しました。この1年間、本学の教育・研究・社会貢献活動を進めるとともに、新潟・長岡地域の諸活動にも参加してきました。その過程を通して、あらためて、「長岡大学は地域に役立つ教育機関」をめざすべきことを強く実感し、長岡大学の教育等の活動内容を地域社会に発信するブックレットの刊行を再開することとしました。

そもそも、本学の建学の精神は、次の2つに表現されておりますので、本質的に、長岡大学は「地域に役立つ大学」を目指さなければなりません。

☆幅広い職業人としての人づくりと実学実践教育の推進

☆地域社会に貢献し得る人材の育成

本学は、この間の大学改革の流れのなかで、次の4件のプログラムが文部科学省の大学改革補助事業（補助金）に選ばれ、改革を進めてまいりました。

- ・平成18～20年度 現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代G P）「産学融合型専門人材開発プログラム－長岡方式－」
- ・平成19～21年度 現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代G P）「学生による地域活性化提案プログラム」
- ・平成19～21年度 社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム
「長岡地域産業活性化のためのMOT教育『イノベーション人材養成プログラム』」
- ・平成21～23年度 大学教育・学生支援推進事業【テーマB】学生支援推進プログラム「学生の3つの就職力一体形成支援プログラム」

こうしたプログラムによる教育改革を経て、現在、一言でいうと、＜産学融合教育プログラム＞を進化させ、＜専門能力（資格対応型専門教育）+社会人基礎力（産学連携型キャリア開発教育）＞を身につけた＜地域が求める人材＞を養成しています。その結果、就職内定率も大変すばらしい結果（平成25年3月卒業生は99.0%）を生んでいます。

私は、常々、大学全入時代を迎え、地方の大学は「魅力」を出し地域に評価されていかないと生き残れないと思ってきました。地方の、小さな大学ができることのひとつが「地域活性化」だと思います。都会のマンモス大学にはできない地域活性化策を具現化することで、地域の産業・企業や地域社会の方々へ＜長岡大学の卒業生は使えるね＞とか＜役に立つね＞という評価を頂けるよう、大学挙げて地域との協働を進めて行きたいと考えています。

この長岡大学ブックレットは、本学の教育の様々な特徴ある取組をご紹介します媒体ですが、私としては、以上の趣旨を踏まえて、この「地域活性化」の取組を中心に、刊行していきたいと考えます。ブックレットをご一読いただければ、長岡大学の地域活性化の取組がわかり、地域との協働の姿が浮かび上がるよう、継続的に刊行して行きたいと考えます。そして、このブックレットの内容に関し、企業や地域の方々からどしどしご意見をいただき、情報交流を活発にし、取組の改善を図って行きたいと考えます。ご感想等どしどしご意見ください。ご連絡先は次の通りです。

☆ご連絡先 TEL 0258-39-1600（代） 担当：総務
E-mail info@nagaokauniv.ac.jp

一 「学生による地域活性化プログラムの展開 (平成24年度)」にあたって一

長岡大学教授／地域活性化プログラム運営委員長
鯉江 康正



長岡大学は、文部科学省の〈現代的教育ニーズ取組支援プログラム（いわゆる現代GP）〉に採択された「学生による地域活性化提案プログラム－政策対応型専門人材の育成－（略称：地域活性化GP）」を平成19～21年度の3年間、国の助成を受けて実施しました。通常はこうした補助金助成期間が終了するとプログラムも止めてしまう大学が多いのですが、本学は、このプログラムをさらに発展させる形で、継続してきました。

それが、現在の「学生による地域活性化プログラム」です。このプログラムは、①取組み課題を長岡市総合計画から地域コミュニティやNPOなど多様な課題に取組むこと、②長岡市から中越地域・新潟県などより広域の地域を対象にすること、③政策提案だけでなく実行・具体的行動まで行うこと、④3・4年生専門ゼミを基本としそれ以外のチームも取組主体に加えること、などの改善を行うことにより、社会貢献を一層充実させ、学生の社会人基礎力の強化・向上をめざすものです。

本ブックレットは、こうした地域活性化プログラムの最新（平成24年度）の概要をとりまとめたものです（平成25年度版は今年中に刊行します）。市民・住民の皆様、企業の方々、教育関係者さらに高校生の皆さんに、本学教育における地域連携・地域貢献の活動をぜひ知っていただきたいと思います。

さて、平成24年度のこのプログラムには、本文に掲載されていますように、次の7つのゼミが地域課題解決に取組みました。

- | | |
|-------------------------------------|---------|
| ・「まちの駅ネットワークみつけ」の情報発信と地域への影響調査 | 鯉江 康正ゼミ |
| ・グラスルーツグローバリゼーション－草の根・地域からの地球一体化推進－ | 広田 秀樹ゼミ |
| ・バランス・スコアカードによる環境経営 | 吉盛 一郎ゼミ |
| ・セーフコミュニティの可能性－いのちを大切にすまちづくり－ | 菊池いづみゼミ |
| ・地域の魅力発信による絆結び－神谷の魅力を知り・伝え・つなげる－ | 高橋 治道ゼミ |
| ・十分杯の広報活動 | 権 五景ゼミ |
| ・企業の情報発信とホームページの役割 | 村山 光博ゼミ |

これら7取組みの概要は、本文23頁以降をご覧ください。取り組み状況の概要がわかります。なお、各取組みの詳細については、『学生による地域活性化プログラム 平成24年度報告書』（約400頁）で公表しています。ご関心をお持ちの方はご連絡ください。

本ブックレットでご一読いただきたいのは、7頁以降のプログラム遂行による社会人基礎力の向上と取組みに対する評価です。大きな成果があがっていることが確認できます。この成果がゼミ生の進路（高就職率）にも好影響を与えています。

本学は今後も、学生にも地域の皆様にもさらに評価される教育（社会人基礎力向上）と地域貢献（地域の活性化）を推進する決意であります。本ブックレットをご一読いただき、ぜひご感想をお聞かせください。お待ちしております。

平成26年2月

ご連絡先：長岡大学地域連携研究センター

T E L : 0258-39-1600

E-mail : chicken@nagaokauniv.ac.jp

学生による地域活性化 プログラムの展開（平成24年度）

目 次

はじめに	鯉江 康正
第1章 学生による地域活性化プログラムの概要	1
1.1 プログラムの位置づけ	1
1.2 プログラムの概要	1
第2章 平成24年度の経過	4
2.1 本年度取組の経過	4
2.2 平成24年度の学生による地域活性化取組ゼミ	5
2.3 平成24年度の推進体制	6
第3章 本取組における学生教育の評価	7
3.1 社会人基礎力の評価	7
3.2 ビジネス展開能力の評価	18
第4章 取組結果のまとめ	21
4.1 取組成果と今後の課題	21
4.2 取組結果の概要	22
巻末参考資料	
1 学生による地域活性化プログラム平成24年度成果発表会（ポスター）	31
2 学生による地域活性化プログラム平成24年度成果発表会	32
3 社会人基礎力診断シート（学生用）	34
4 社会人基礎力診断シート（教員用）	35
平成19年度～平成24年度 学生による地域活性化プログラム取組一覧	36

第1章 学生による地域活性化プログラムの概要

1.1 プログラムの位置づけ

本年度より実施された「学生による地域活性化プログラム」は、「平成19年度採択文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP） 学生による地域活性化提案プログラム－政策対応型専門人材の育成－（平成19年度～21年度）」（略して、地域活性化GP）を継続的に行う取組であるが、提案にとどまらず具体的な行動を学生が行うことによって、学生の社会人基礎力と地域貢献を目指すものである。

地域活性化GPは、長岡市の総合計画を題材に地域活性化提案を行うものであったが、本プログラムは「NPO法人 長岡産業活性化協会（NAZE）との共同研究」や「地域コミュニティ」など、広く中越地域や新潟県を対象とした取組である。また、活動は本学3、4年生のゼミを基本とするが、ゼミを越えたチーム・任意団体でも良い。

（注）「学生による地域活性化提案プログラム－政策対応型専門人材の育成－」については、本学ホームページ<http://www.nagaokauniv.ac.jp>ないし長岡大学ブックレット第16号『長岡大学教育プログラムVI 学生による地域活性化提案プログラム－政策対応型専門人材の育成－』を参照されたい。

1.2 プログラムの概要

(1) プログラムの内容

長岡市は三度にわたって11市町村で合併したが、新市として発展する上で様々な地域課題の解決に迫られている。また、地域主権の考えのもとに「新潟県と新潟市が合併する新潟州構想」や「長岡市人口40万人都市構想（平成24年の人口は28万人）」もあり、地域問題は益々広域化し、より独自の方向性の検討が期待されている。

本プログラムにおいては、学生グループが長岡地域や新潟県の課題を対象に実地に調査研究を行い地域活性化方策の提案・地域活性化の実践を行う。これによって、学生の社会人基礎力、企画・提案力の開発と地域活性化への貢献を同時に実現することを目的とする。

本プログラムの内容は、①問題解決型教育＝体験・参加型教育の実践として、②長岡地域および新潟県内、またより一般的に地域の課題（環境、福祉、市民生活、産業等）をゼミナール（3年次、4年次）のテーマとしてとりあげ、③ゼミナールの学生グループがテーマごとに設ける地域連携アドバイザー（市担当者、関係団体の職員等）との緊密な連携と専門教員の指導の下に、④専門知識とスキルを応用してフィールド調査等の作業を行い、⑤地域活性化に貢献するとともに、その活動を広報し、地域社会にフィードバックすることである。

(2) プログラムの趣旨・目的

長岡大学は地域の産業界のニーズに対応した「幅広い職業人」の育成を第一の使命として設立された。長岡大学の教育の基本は社会人基礎力とビジネス展開能力（企画力、提案力）の育成、ビジネスの現場に直結した専門的な知識とスキルの習得である。この考えを実現するため、地域の産業界との緊密な連携の下に実践的教育を展開する「産学融合型専門人材開発プログラム－長岡方式－」を確立した。

本プログラムは既に確立している長岡大学の教育プログラムをさらに発展させ、産業界だけでなく、まちづくりや生活環境の改善など地域社会のニーズにも貢献できる人材を育成することを第一の狙いとしている。長岡地域は、この8年の間に「7.13水害」、「中越大震災」、「豪雪」と多くの災害にみまわれてきた。そのような経験の中で、地域社会が必要とした人材は、自分で判断して行動できる実践力のある人材であった。本取組は、学生を地域が求めるこのような人材に育て上げることを目的としている。

(3) 学生教育の目標、養成する人材像

本学の基本理念に対応して、長岡大学改革宣言（平成16年10月発表）において、本学の教育の目標を次のように掲げた。

地域社会、地域の企業と連携し、地域の産業界のニーズに直結した長岡大学独自の「ビジネス能力開発プログラム」を展開し、ビジネスを発展させるための企画を立て、提案し、実行させる能力と人間力のある人材を創造する。

さらに、学生に対して「毎日の学生生活で充実感を、レベルアップを確認して達成感を、卒業のときに4年間を振り返って満足感を」実感してもらうことを約束している。

本取組は、上記のような本学の教育の目標と学生に対するコミットメントを達成することと、本学の基本理念を具体的に実践することを目指した教育プログラムの一環である。

本プログラムは、産業界ばかりでなく、市民活動やNPO等の非営利的な活動をも含めて、地域社会と連携し、地域の活性化に貢献できる実践力のある人材育成を目指すものである。

(4) 設定する学生教育の目標と養成する人材像のニーズ

本取組における学生教育の目標は、

- ① 社会人基礎力（アクション力、シンキング力、チームワーク力）を向上させること
- ② ビジネス展開能力（企画・提案力・実行力）を向上させること
- ③ 専門的技法に関するスキルを向上させること

である。

専門的技法として学習するものは、情報・データ収集技法（情報検索、インターネット活用）、統計分析技法（統計の読み方、表計算ソフトの応用）、社会調査技法（アンケート、インタビュー）、レポート作成法、プレゼンテーション技法などである。なお、専門的技法については「学生による地域活性化提案プログラム—政策対応型専門人材の育成—平成19年度活動報告書」（平成20年3月、長岡大学）を参照されたい。

上記の能力と技法を身につけ、実際に長岡地域の社会的問題に関わった学生は、地域社会が必要とする、自分で判断して行動できる実践力のある人材として歓迎されると考えている。

(5) 目標を達成するための教育プログラム

本プログラムは、ゼミナール（3,4年次）における問題解決型教育（Problem-based Learning、Project-based Learning、PBL）＝体験・参加型教育の実践により、学生の企画・提案力の向上を図ろうとするものである。プログラムは大きく、

- ① 実課題の設定（地域社会が実際に解決したいと考えている問題を理解した上で、取り組むべき実課題の設定を行う。）
- ② 参考になる情報やデータの収集（実課題に関係する調査報告、統計データ、論評、過去の経緯等を収集し要点を整理する。）
- ③ フィールド調査の実施（アンケート調査やヒアリング調査、市民活動への参加を通じて、市民や産業界が真に求める施策や地域が活性化するための方策を検討し実際に活動する。）
- ④ 報告書の作成と発表（調査検討を通じて得られた知見をもとに報告書の作成を行うとともに、行政当局、市民団体、企業等の関係者、市民に対して活動報告を行う。）

の4つのステップで構成されるが、課題の選択、活動の内容等によって具体的な方法は様々なものになる。それについては「4. 2 取組結果の概要」を参照されたい。

第2章 平成24年度取組の経過

2.1 本年度取組の経過

平成24年度の「学生による地域活性化プログラム」の主な実施経過は、次のとおりである。

<平成24年度取組の経過>

4月27日	平成24年度地域活性化プログラム参加ゼミ決定
5月17日	平成24年度第1回地域活性化プログラム運営委員会開催（以後、毎月1回開催）
6月13日	平成24年度第2回地域活性化プログラム運営委員会開催
7月11日	平成24年度第3回地域活性化プログラム運営委員会開催
7月19日	平成24年度第1回地域活性化プログラム推進協議会開催 於：長岡大学
9月6日	平成24年度第4回地域活性化プログラム運営委員会開催
10月11日	平成24年度第5回地域活性化プログラム運営委員会開催
10月27日 10月28日	悠久祭（大学祭）において、地域活性化プログラムの活動を紹介
11月8日	平成24年度第6回地域活性化プログラム運営部会開催
11月17日	平成24年度第2回地域活性化プログラム推進協議会開催 中間成果発表会を同時開催 於：長岡大学大教室
12月5日	平成24年度第7回地域活性化プログラム運営部会開催
1月23日	平成24年度第8回地域活性化プログラム運営部会開催
2月16日	地域活性化プログラム平成23年度成果発表会開催 於：ホテルニューオータニ長岡 NCホール
2月28日	平成24年度第9回地域活性化プログラム運営部会開催
3月14日	平成24年度第3回地域活性化プログラム推進協議会開催 於：長岡大学



2.2 平成24年度の学生による地域活性化プログラム取組ゼミ

本年度は7ゼミ7取組が実施された。各取組の活動報告については「学生による地域活性化プログラム平成24年度活動報告」を参照されたい。

<取組ゼミとテーマ>

ゼミ名	テ　　マ
鯉江 康正 ゼミ	「まちの駅ネットワークみつけ」の情報発信と地域への影響調査
広田 秀樹 ゼミ	グラスルーツグローバルイゼーション —草の根・地域からの地球一体化推進—
吉盛 一郎ゼミ	バランス・スコアカードによる環境経営
菊池 いづみゼミ	セーフコミュニティの可能性 —いのちを大切にするまちづくり—
高橋 治道ゼミ	地域の魅力発信による絆結び —神谷の魅力を知り・伝え・つなげる—
権 五景ゼミ	十分杯の広報活動
村山 光博 ゼミ	企業の情報発信とホームページの役割

(注) ゼミの順序は、成果報告会発表順である。



2.3 平成24年度の推進体制

平成24年度の『学生による地域活性化プログラム』の推進体制は、次のとおりである。

<総合アドバイザー>

所 属	職 名	氏 名
長岡市市長政策室政策企画課	課長	渡辺 則道
株式会社品川鋳造	代表取締役社長	品川 十英

<地域連携アドバイザー>

所 属	職 名	氏 名
市民協働部市民協働推進室	主任	木村 圭介
まちの駅ネーブルみつけ	駅長	中川 一男
福祉保健部長寿はつらつ課	主査	若月 恵子
福祉保健部長寿はつらつ課	保健師	伊野 善貴
長岡歯車資料館	館長	内山 弘
ながおかまちの駅	駅長	太刀川 喜三
神谷地区	区長	白井 湛
NPO法人ながおか生活情報ねっと	理事長	桑原 眞二
自営	ITコンサルタント	David Boudreau
コミュニティ・リーダーズ・ネットワーク	代表	大出 恭子
NPO法人長岡産業活性化協会NAZE	情報化コーディネーター	杉浦 聡
金井会計事務所	所長	金井 助智
中小企業診断士中村公哉事務所	所長	中村 公哉

<学内推進委員>

学 長	教 授	内藤 敏樹
運営委員長	教 授	鯉江 康正
ゼミ担当教員	教 授	菊池 いづみ
ゼミ担当教員	准教授	権 五景
ゼミ担当教員	教 授	高橋 治道
ゼミ担当教員	教 授	広田 秀樹
ゼミ担当教員	准教授	村山 光博
ゼミ担当教員	教 授	吉盛 一郎

第3章 本取組における学生教育の評価

地域活性化プログラムにおける学生教育の目標は、

- ① 社会人基礎力（アクション力、シンキング力、チームワーク力）を向上させること
- ② ビジネス展開能力（企画・提案力・実行力）を向上させること
- ③ 専門的技法に関するスキルを向上させること

である。

3.1 社会人基礎力の評価

社会人基礎力が伸びたかどうかについては、学生に「社会人基礎力診断シート（学生用）アンケート」（参考資料3）を実施した。また、プログラム推進協議会の構成員であるゼミ担当教員には、同様の「社会人基礎力診断シート（教員用）アンケート」（参考資料4）を実施した。

アンケートは、取組に参加した学生一人一人を対象に、社会人基礎力の変化を評価する形で実施した。したがって、学生は自己評価（有効回収数90）であり、教員は各ゼミ学生についての評価である。

(1) アクション力の評価

アクション力に関する指標は、[主体性]、[働きかけ力]、[実行力]である。

① 主体性

取組に「1. 進んで取り組んだ」と答えている学生は61.1%で、教員評価では51.1%となっている。学生と教員の評価を比較すると、教員の評価の方が10ポイント低くなっている。

Q1. [主体性] あなた（この学生）は、進んで取り組みましたか。

	1. 進んで取り組んだ	2. あまり進んで取り組めなかった	3. 取り組めなかった	合計
学生	55	32	3	90
教員	48	41	5	94
学生	61.1%	35.6%	3.3%	100.0%
教員	51.1%	43.6%	5.3%	100.0%



② 働きかけ力

取組の実施にあたって他の人に積極的に働きかけたかどうかについては、「1. 積極的に働きかけた」と回答している学生が44.4%で、教員が34.0%となっている。学生と教員の評価を比較すると、10ポイントほど教員の方が低くなっている。「2. あまり働きかけられなかった」と回答している学生は44.4%で、教員の評価では56.4%となっている。

[働きかけ力]は、[主体性]や[実行力]に比較して「1. 積極的に働きかけた」学生がやや少なく、まじめで、こつこつと取組には参加するが、リーダーシップを発揮できる学生が少ない結果となっている。

Q2. [働きかけ力] あなたは、取組の実施にあたって他の人に働きかけましたか。

	1. 積極的に働きかけた	2. あまり働きかけられなかった	3. ほとんど働きかけなかった	合計
学生	40	40	10	90
教員	32	53	9	94
学生	44.4%	44.4%	11.1%	100.0%
教員	34.0%	56.4%	9.6%	100.0%

③ 実行力

取組にあたって確実に実行できたかどうかについては、「1. 確実に実行できた」と回答している学生が52.2%で、教員が61.7%と、この設問では教員の評価の方が非常に高く、学生の評価を10ポイントほど上回っている。「2. あまり実行できなかった」と回答している学生は43.3%で、教員の評価では31.9%となっている。実際の活動状況から判断すると、学生は取組の過程でつまづきながら進んでいるので、評価が厳しくなっている可能性がある。

Q3. [実行力] あなたは、取組を確実に実行できましたか。

	1. 確実に実行できた	2. あまり実行できなかった	3. ほとんど実行できなかった	合計
学生	47	39	4	90
教員	58	30	6	94
学生	52.2%	43.3%	4.4%	100.0%
教員	61.7%	31.9%	6.4%	100.0%



④ アクション力

取組前と比較して、アクション力が「1. 上昇した」と回答している学生は60.0%で、教員は50.0%とアクション力の総合評価でも上昇した学生が多いことが分かる。

とりわけ、学生は「1. 上昇した」と回答している割合が高くなっており、総合的には成長を実感しているものと思われる。

Q4. 取組前と比較して、アクション力は、上昇したと思いますか。

	1. 上昇した	2. あまり上昇しなかった	3. ほとんど変化がなかった	合計
学生	54	27	9	90
教員	47	33	14	94
学生	60.0%	30.0%	10.0%	100.0%
教員	50.0%	35.1%	14.9%	100.0%

(2) シンキング力の評価

シンキング力に関する評価項目は、[課題発見力]、[計画力]、[創造力]である。

① 課題発見力

課題を「1. 明らかにできた」と回答している学生は56.7%であった。教員評価では55.3%となっている。この項目については学生の自己評価と教員評価がほぼ同じである。課題を発見することは取組の正否にとって重要であるが、初めて取組に参加する3年生は苦勞していたようであるが、本プログラムも6年目を迎え、過年度の取組を活かしつつ何をすべきかを考えられている4年生も多くみられた。

Q5. [課題発見力] あなたは、課題を明らかにできましたか。

	1. 明らかにできた	2. あまり明らかにできなかった	3. ほとんど明らかにできなかった	無回答	合計
学生	51	34	4	1	90
教員	52	35	7	0	94
学生	56.7%	37.8%	4.4%	1.1%	100.0%
教員	55.3%	37.2%	7.4%	0.0%	100.0%



② 計画力

課題解決の準備については、「1. 準備できた」と回答している学生が32.2%で、教員評価では47.9%となっている。本学の学生の場合、言われたことはやるが、自分から進んで計画し実行する力が弱い傾向がある。この傾向は本学のみならず、今の若者の特徴でもあると思われるが、次の指標の〔創造力〕同様、自分自身で考える能力の訓練が望まれる。

このような取組の経験が無いか少ない学生が多く、自己評価が低くなっている可能性がある。教員の場合、毎年取組をみてきているわけで、例年並みという評価が主流であると思われる。ちなみに、昨年度の教員評価では「1. 準備できた」の割合は41.3%であった。

Q 6. [計画力] あなたは、課題解決の準備ができましたか。

	1. 準備できた	2. あまり準備できなかった	3. ほとんど準備できなかった	合計
学生	29	57	4	90
教員	45	43	6	94
学生	32.2%	63.3%	4.4%	100.0%
教員	47.9%	45.7%	6.4%	100.0%

③ 創造力

新しいアイデアを出せたかという質問に対して、「1. 十分出せた」と回答している学生の割合は27.8%と極端に低い結果となっている。それに対して、教員側の評価では、35.1%の学生が「1. 十分出せた」という結果になっている。取組検討段階で、実際には多くの学生がいくつかのアイデアを出せているが、実行に移そうという段になって臆してしまう面が見られる。この点は、昨年度も見られた傾向であり、自分が出しているアイデアをなかなか実行に移せないことが影響しているように思われる。

Q 7. [創造力] あなたは、新しいアイデアを出せましたか。

	1. 十分出せた	2. あまり出せなかった	3. ほとんど出せなかった	合計
学生	25	56	9	90
教員	33	52	9	94
学生	27.8%	62.2%	10.0%	100.0%
教員	35.1%	55.3%	9.6%	100.0%



④ シンキング力

取組前と比較してシンキング力が向上したかどうかについては、「1. 上昇した」と回答している学生は48.9%で、参加学生全体の半数近くが、シンキング力が上昇したと考えている。教員評価では53.2%となっている。「3. ほとんど変化がなかった」と回答している学生は4.4%で、教員評価では11.7%である。

この結果から、本取組は個人の感じ方もあるが、少なくともプラスに働いていると思われる。「アクション力」同様、「シンキング力」でも総合評価では成長がみられている。

Q 8. 取組前と比較して、シンキング力（課題発見力、計画力、創造力）は、
上昇したと思いますか。

	1. 上昇した	2. あまり上昇しなかった	3. ほとんど変化がなかった	合計
学生	44	42	4	90
教員	50	33	11	94
学生	48.9%	46.7%	4.4%	100.0%
教員	53.2%	35.1%	11.7%	100.0%

(3) チームワーク力の評価

チームワーク力に関する指標は、[発信力]、[傾聴力]、[柔軟性]、[状況把握力]、[規律性]、[ストレスコントロール力] である。

① 発信力

自分の意見を相手に伝えられたかどうかについて、「1. 十分伝えられた」と回答している学生の割合は42.2%で、教員評価では54.3%となっており、教員評価の方が12.1ポイントも高くなっている。

「2. あまり伝えられなかった」、「3. ほとんど伝えられなかった」をあわせると学生の割合は57.8%、教員評価では45.7%であり、積極性の無い学生もみられる。

Q 9. [発信力] あなたは、自分の意見を相手に伝えられましたか。

	1. 十分伝えられた	2. あまり伝えられなかった	3. ほとんど伝えられなかった	合計
学生	38	46	6	90
教員	51	39	4	94
学生	42.2%	51.1%	6.7%	100.0%
教員	54.3%	41.5%	4.3%	100.0%

② 傾聴力

相手の意見を聞けたかどうかの傾聴力については、「1. 十分聞けた」と回答している学生の割合は73.3%で、教員評価では75.5%と非常に高くなっている。

「発信力」は低い、「傾聴力」は高いという傾向は毎年同じである。

Q10. [傾聴力] あなたは、相手の意見を聞けましたか。

	1. 十分聞けた	2. あまり聞けなかった	3. ほとんど聞けなかった	合計
学生	66	22	2	90
教員	71	18	5	94
学生	73.3%	24.4%	2.2%	100.0%
教員	75.5%	19.1%	5.3%	100.0%

③ 柔軟性

意見の違いなどを理解したかどうかについては、「1. 十分理解した」と回答している学生の割合が67.8%、教員評価では72.3%となっている。教員評価の方が4.5ポイント高くなっている。取組の継続により活発な意見交換がなされているゼミも多く見られるが、テーマが継続的であるために惰性で取り組んでいる学生も見られる。

Q11. [柔軟性] あなたは、意見の違いなどを理解しましたか。

	1. 十分理解した	2. あまり理解しなかった	3. ほとんど理解しなかった	無回答	合計
学生	61	25	3	1	90
教員	68	23	3	0	94
学生	67.8%	27.8%	3.3%	1.1%	100.0%
教員	72.3%	24.5%	3.2%	0.0%	100.0%

④ 状況把握力

周囲の人や物事との関係をよく理解したかという質問に対しては、「1. 十分理解した」と回答している学生の割合は42.2%で、教員評価では44.7%となっている。

また、「2. 一定に理解した」を加えると、学生の自己評価では95.6%、教員評価では94.7%となっている。ここでも、取組の継続により、学生の活動への状況把握力の向上が見られる。

Q12. [状況把握力] あなたは、周囲の人や物事との関係を良く理解しましたか。

	1. 十分理解した	2. 一定に理解した	3. ほとんど理解しなかった	合計
学生	38	48	4	90
教員	42	47	5	94
学生	42.2%	53.3%	4.4%	100.0%
教員	44.7%	50.0%	5.3%	100.0%

⑤ 規律性

ルールや約束を守ったかどうかについては、「1. 守った」と回答している学生の割合が81.1%で、教員評価では79.8%となっている。繰り返しになるが、取組の継続により、外部の人とのアポイントの重要性が十分に理解されてきていると思われる。また、学生同士の話し合い（学生自身によるサブゼミ）も多く実施されていた。

Q 13. [規律性] あなたは、ルールや約束を守りましたか。

	1. 守った	2. あまり守れなかった	合計
学生	73	17	90
教員	75	19	94
学生	81.1%	18.9%	100.0%
教員	79.8%	20.2%	100.0%

⑥ ストレスコントロール力

ストレスをうまく解消できたかという質問に対して「1. うまく解消できた」と回答している学生の割合は65.6%で、教員評価の76.6%を10.0ポイント下回っている。取組において多くの学生は悩みながら活動しているので、それを克服できなかつたと感じているようである。

Q 14. [ストレスコントロール力] あなたは、ストレスをうまく解消できましたか。

	1. うまく解消できた	2. あまり解消できなかった	合計
学生	59	31	90
教員	72	22	94
学生	65.6%	34.4%	100.0%
教員	76.6%	23.4%	100.0%

⑦ チームワーク力

取組前と比較して、チームワーク力が上昇したかどうかについては、学生の70.0%が「1. 上昇した」と回答している。教員評価では57.4%となっており、それなりにチームワーク力は上昇したと考えられる。

昨年度と比較すると、学生の評価は10ポイントほど上昇しており、学生自身はチームとしてうまく活動できたと思っているようである。

Q 15. 取組前と比較して、チームワーク力は、上昇したと思いますか。

	1. 上昇した	2. あまり上昇しなかった	3. ほとんど変化がなかった	合計
学生	63	22	5	90
教員	54	27	13	94
学生	70.0%	24.4%	5.6%	100.0%
教員	57.4%	28.7%	13.8%	100.0%

(4) 3つの社会人基礎力の比較

以上3つの社会人基礎力の評価結果を図示すると、次のとおりである。

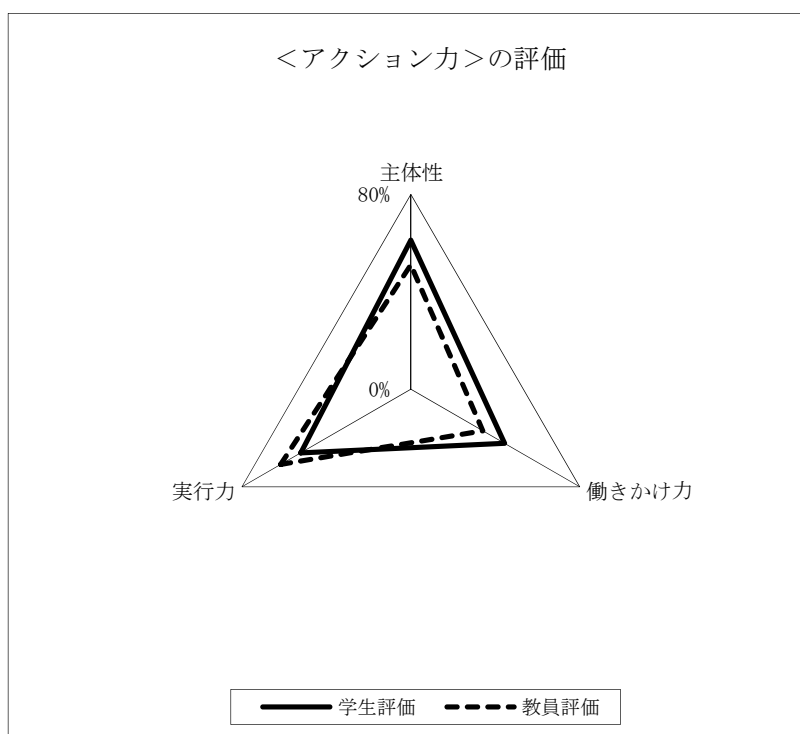
① アクション力

アクション力では、例年通り、働きかけ力の評価が、学生、教員ともに低くなっている。

アクション力の3つの指標を比較すると、今年度の学生の場合、主体的には取り組めたと思っている学生が多いが、実行できたかどうかについては、学生自身は厳しい見方をしている。昨年度の場合、主体的に取り組めたと評価している学生は44.2%であり、実行できたとしている学生は46.2%であった。

＜アクション力＞の評価

		学生評価	教員評価
主体性	進んで取り組んだ学生の割合	61.1%	51.1%
働きかけ力	積極的に働きかけた学生の割合	44.4%	34.0%
実行力	確実に実行できた学生の割合	52.2%	61.7%



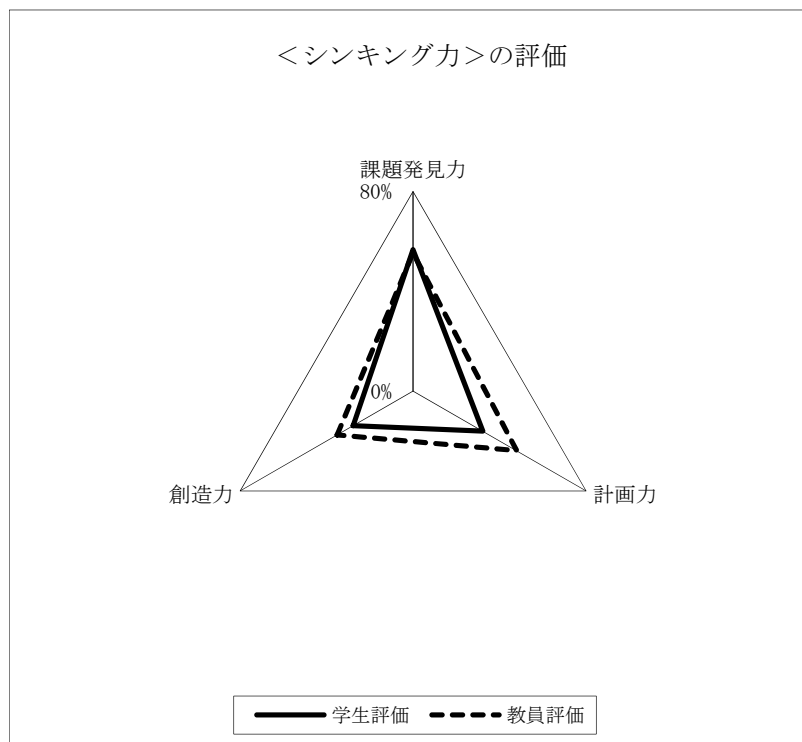
② シンキング力

学生の自己評価の場合、課題は見つけられたが、自分で計画して課題に立ち向かい、課題解決ができた学生は残念ながら少ないということになる。とりわけ、学生の自己評価では創造力が著しく低くなっている。これに対して、教員評価では高いわけではないが約3分の1の学生が創造力を発揮できたと評価している。学生の場合、自己評価では絶対評価に近い可能性があるが、教員の場合、この取組にまだ参加していない1、2年生や取組に参加していないゼミの3、4年も見ているわけで、総合的（相対的に）に判断すれば、評価が高いことになっていると思われる。

学生が自己評価で厳しい評価をしていることは、その学生にとって成長への原動力になるものと思われる。

<シンキング力>の評価

		学生評価	教員評価
課題発見力	明らかにできた学生の割合	56.7%	55.3%
計画力	準備できた学生の割合	32.2%	47.9%
創造力	十分出せた学生の割合	27.8%	35.1%



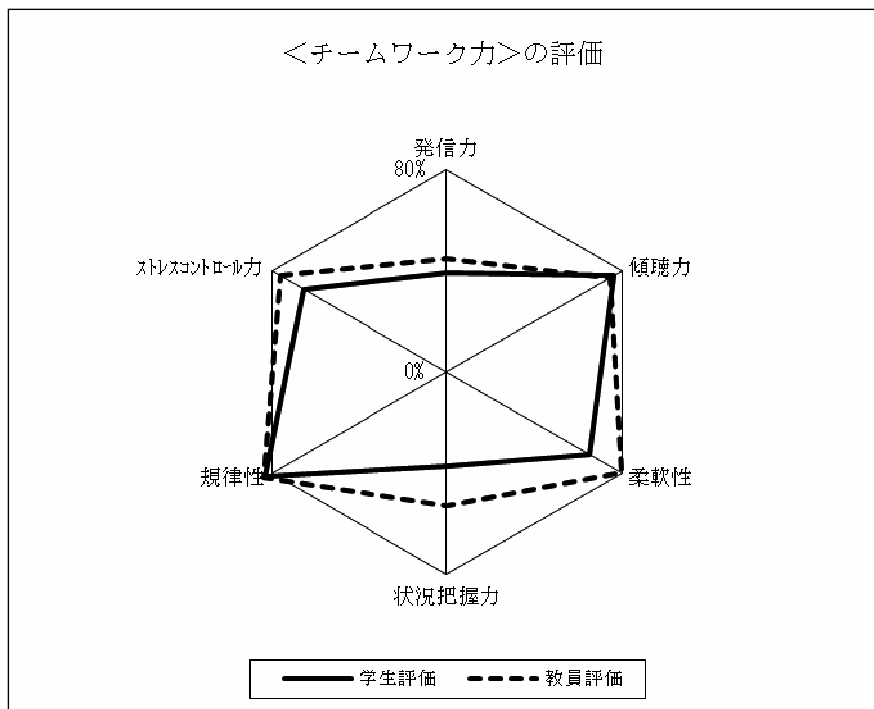
③ チームワーク力

チームワーク力は、「アクション力」や「シンキング力」よりも総合的に高い評価となっている。個別にみると、傾聴力、柔軟性、規律性、ストレスコントロール力で、教員評価が高くなっている。

学生の自己評価も同様であるが、教員の評価が発信力と状況把握力が低い点は、今後指導を強めていく必要があるだろう。

＜チームワーク力＞の評価

		学生評価	教員評価
発信力	十分伝えられた学生の割合	42.2%	54.3%
傾聴力	十分聞いた学生の割合	73.3%	75.5%
柔軟性	十分理解した学生の割合	67.8%	72.3%
状況把握力	十分理解した学生の割合	42.2%	44.7%
規律性	守った学生の割合	81.1%	79.8%
ストレスコントロール力	うまく解消できた学生の割合	65.6%	76.6%



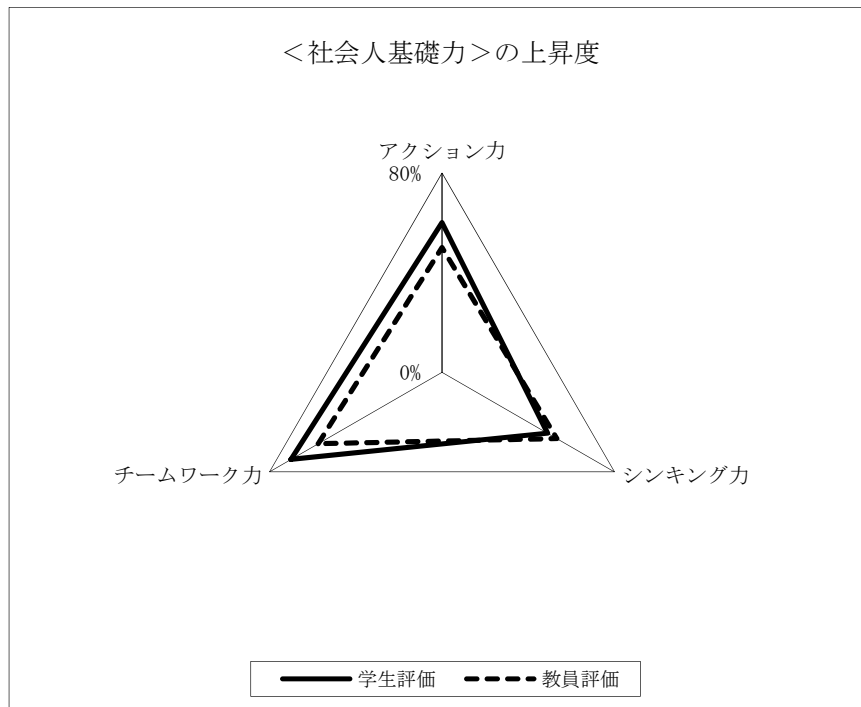
④ 社会人基礎力の上昇度

3つの社会人基礎力の上昇度（取組前と取組後の比較）は、学生の自己評価と教員評価の間に多少のずれはあるが、概ね相関している。

上述の通り総合評価でもシンキング力の上昇度合いが低く、今後の課題として検討していく必要がある。この数値が高いか低いかは評価が分かれるところであろうが、1つの講義で学生の社会人基礎力がこれだけの伸びるということはあまり考えられず、プログラムとしては一応の成功がみられるのではなかろうか。

＜社会人基礎力＞の上昇度

		学生評価	教員評価
アクション力	上昇した学生の割合	60.0%	50.0%
シンキング力	上昇した学生の割合	48.9%	53.2%
チームワーク力	上昇した学生の割合	70.0%	57.4%



3.2 ビジネス展開能力の評価

ビジネス展開能力（企画、提案）については、『成果発表会』において、参加者（地域連携アドバイザー、一般参加者、本学学生、本学教職員）に対して、「地域活性化プログラム成果発表会意見シート（参考資料5）」にて、取組の評価等をいただいた。

意見シートは、参加者 173 名に対して、116 名回収できた。回収率は 67.1%である。当日は以下の 7 取組の発表がなされた。

<取組ゼミとテーマ>

ゼミ名	テ ー マ
鯉江 康正 ゼミ	「まちの駅ネットワークみつけ」の情報発信と地域への影響調査
広田 秀樹 ゼミ	グラスルーツグローバルイゼーション —草の根・地域からの地球一体化推進—
吉盛 一郎ゼミ	バランス・スコアカードによる環境経営
菊池 いづみゼミ	セーフコミュニティの可能性 —いのちを大切にするまちづくり—
高橋 治道ゼミ	地域の魅力発信による絆結び —神谷の魅力を知り・伝え・つなげる—
権 五景ゼミ	十分杯の広報活動
村山 光博 ゼミ	企業の情報発信とホームページの役割



(1) 取組テーマ（タイトル）と内容の合致

取組テーマ（タイトル）と内容の合致については、「1. 合致していた」との回答が全体で90.3%であった。活動を進めるなかで活動の範囲や方向性が変わった取組もあったようであるが、タイトルは非常に重要であり、この点は担当教員が指導していくことが望まれる。

Q1 取組テーマ（タイトル）と内容は合致しておりましたか。

		1. 合致していた	2. あまり合致していなかった	3. 合致していなかった	小計	無回答	合計
実数	アドバイザー	63	4	0	67	3	70
	一般参加者	158	18	1	177	12	189
	本学学生	373	37	2	412	8	420
	本学教職員	116	14	0	130	3	133
	合計	710	73	3	786	26	812
構成比 (%)	アドバイザー	94.0	6.0	0.0	100.0		
	一般参加者	89.3	10.2	0.6	100.0		
	本学学生	90.5	9.0	0.5	100.0		
	本学教職員	89.2	10.8	0.0	100.0		
	合計	90.3	9.3	0.4	100.0		

(2) 取組に対する参加者の興味

各取組への興味については、「1. 興味がある」という回答は、全体で70.7%であった。興味を持てるかどうかは、扱う内容によるが、地域の課題を解決することを目的とした取組である以上、無意味な取組は無いわけで、この設問自体意味がないかもしれない。ただし、本学学生の興味の度合いが低い(61.2%)ことは問題であろう。学生がこれから社会に出て行く上で、多くの事柄に興味を持つことを期待したい。

Q2 この取組に興味をもてましたか。

		1. 興味がある	2. どちらかといえば、興味がない	小計	無回答	合計
実数	アドバイザー	56	11	67	3	70
	一般参加者	149	28	177	12	189
	本学学生	252	160	412	8	420
	本学教職員	95	30	125	8	133
	合計	552	229	781	31	812
構成比 (%)	アドバイザー	83.6	16.4	100.0		
	一般参加者	84.2	15.8	100.0		
	本学学生	61.2	38.8	100.0		
	本学教職員	76.0	24.0	100.0		
	合計	70.7	29.3	100.0		

(3) 発表の仕方

発表については、「1. 非常に優れていた」が26.5%、「2. 優れていた」が55.1%で、この評価はかなり厳しいものではあるが、多くの学生が、壇上で一般市民をも含めた方々の前での発表は初めての経験であり、一応の評価はできるものと思われる。

このプログラムも地域活性化GPの取組から通算すると6年目であり、学生の間には何とかなるだろうという雰囲気を感じられないこともない。自分たちの一年間の活動成果を発表することによって、地域貢献をしていくという意味を指導していく必要がある。

また、学生はミスをしないうために原稿を作成するので、それを読むと棒読みになり、聞いている人に伝わりにくくなると言うことを指導していく必要もある。

Q3 発表の仕方はどう感じましたか。

		1. 非常に優れていた	2. 優れていた	3. やや問題あり	4. 問題外	小計	無回答	合計
実数	アドバイザー	18	38	10	1	67	3	70
	一般参加者	50	93	31	3	177	12	189
	本学学生	116	227	60	9	412	8	420
	本学教職員	24	74	26	4	128	5	133
	合計	208	432	127	17	784	28	812
構成比 (%)	アドバイザー	26.9	56.7	14.9	1.5	100.0		
	一般参加者	28.2	52.5	17.5	1.7	100.0		
	本学学生	28.2	55.1	14.6	2.2	100.0		
	本学教職員	18.8	57.8	20.3	3.1	100.0		
	合計	26.5	55.1	16.2	2.2	100.0		

(4) 取組の評価

取組の評価については、「1. 非常に素晴らしい」が25.1%であった。また、「2. すばらしい」まで加えると79.6%でそれなりに取組が評価されていることがわかる。本学学生についてみると両者の合計は80.1%であり、興味を聞いた質問よりも18.9ポイントも増加している。この結果からも、シンポジウム等への参加機会や学生間の交流機会を増やしていくことが、学生の興味を引き起こし、社会人基礎力を向上させたり、ビジネス展開能力を養成したりするために必要であると思われる。

Q4 学生の取組としてどのように評価できますか。感想をお聞かせください。

		1. 非常に素晴らしい	2. すばらしい	3. やや物足りない	4. 大学生のレベルに達していない	小計	無回答	合計
実数	アドバイザー	17	41	9	0	67	3	70
	一般参加者	46	100	28	2	176	13	189
	本学学生	118	212	73	9	412	8	420
	本学教職員	15	73	35	3	126	7	133
	合計	196	426	145	14	781	31	812
構成比 (%)	アドバイザー	25.4	61.2	13.4	0.0	100.0		
	一般参加者	26.1	56.8	15.9	1.1	100.0		
	本学学生	28.6	51.5	17.7	2.2	100.0		
	本学教職員	11.9	57.9	27.8	2.4	100.0		
	合計	25.1	54.5	18.6	1.8	100.0		

第4章 取組結果のまとめ

平成24年度長岡大学「学生による地域活性化プログラム」のまとめとして、取組成果と今後の課題、各取組の概要を整理しておく。なお、各取組の詳細な内容は「第Ⅱ部 学生による活動報告」を参照されたい。

4.1 取組成果と今後の課題

本プログラムは学生の社会人基礎力、企画・提案力の開発と地域活性化への貢献を目指すものである。ここで本年度の成果と今後の課題を簡単にまとめておく。

- ①取組に熱心に参加した学生については、社会人基礎力のうち、アクション力とチームワーク力はかなり向上したと思われる。また、シンキング力については、その成長度合いが他の2つの「力」よりも低かったものの、提案（地域活性化GPの主たる目的）から実際の活動にウエイトを変えたことにより、自分たちで考えて行動する力の成長は数値以上にみられた。
- ②専門的技法の活用能力についても、活動の中心となっている学生は真剣で成長がみられたが、基礎調査や情報処理が苦手な学生もおり、彼らをどのようにして取組に積極的に参加させ能力アップを図っていくかの方策の検討が必要であろう。
- ③地域活性化への貢献については、アンケートやヒアリングの実施、地域イベントへの参加、ボランティア活動への参加を通して、かなり満足のいく結果が得られていると感じている。また、今年度の成果としては、取組6年目のゼミも多く、学生が調査の進め方をかなり身につけてきている点あげられる。しかしながら、非常に積極的に地域に入り込み活動していく学生がいる一方で、自主性という点についてはまだまだ足りない面も見られる学生がいることは事実である。大学である以上、4年生は卒業していくことになるので、3年生が次の3年生にどう活動を伝えていくかが重要なポイントになると思われる。なお、次年度からは2年生の参加も認めており、3年間かわる学生も出てくるので、今後の発展に期待しているところである。
- ⑤一部のゼミでは次年度の活動について議論を始めており、実際に街へ出て活動しようという機運も見られる。次年度以降も学内予算で取組が継続されるため、地域社会からの応援をお願いしたい。1年間お世話になった皆様、ありがとうございました。今後とも、ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

4.2 取組結果の概要

以下、本年度の取組結果の概要をパネルで紹介して、第Ⅰ部のまとめとしたい。

ゼミ名	テ　　マ
鯉江 康正 ゼミ	「まちの駅ネットワークみつけ」の情報発信と地域への影響調査
広田 秀樹 ゼミ	グラスルーツグローバルイゼーション —草の根・地域からの地球一体化推進—
吉盛 一郎ゼミ	バランス・スコアカードによる環境経営
菊池いづみゼミ	セーフコミュニティの可能性 —いのちを大切にすまちづくり—
高橋 治道ゼミ	地域の魅力発信による絆結び —神谷の魅力を知り・伝え・つなげる—
権 五景ゼミ	十分杯の広報活動
村山光博 ゼミ	企業の情報発信とホームページの役割



平成 24 年度活動報告

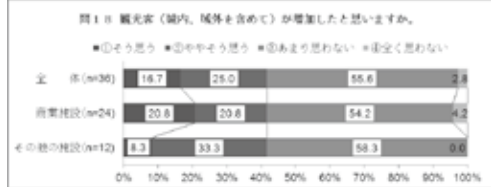
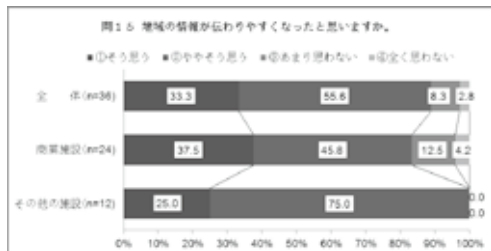
「まちの駅ネットワークみつけ」の
情報発信と地域への影響調査

◆担当教員
鯉江 康正 教授

■ゼミ学生
4年生：浅井 将太、大平 雅史、賀 容、胡 黎、陳 琴、彭 丹、刘 梁、渡邊 直斗
3年生：周 友糧、永井 友之、西山 和之

取組みの目的

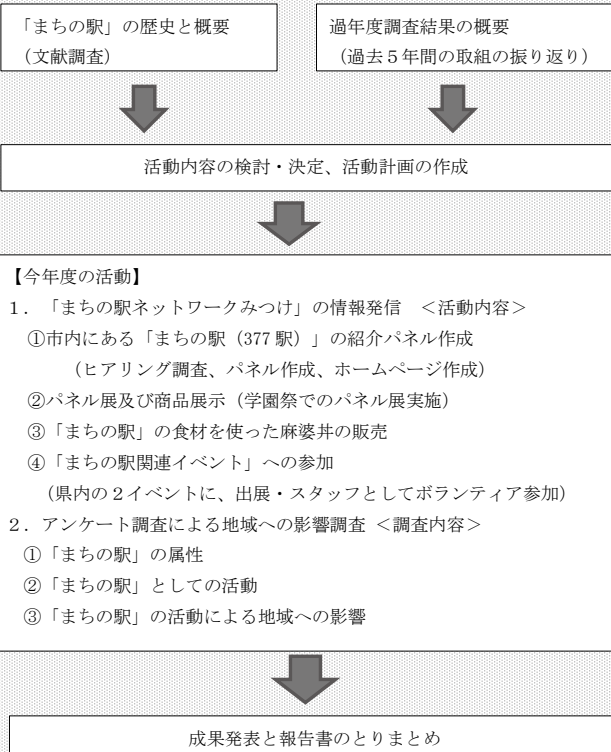
越後長岡まちの駅の情報発信活動を通して見附市市の魅力を市民や地域の人々に伝えると共に、まちの駅の活動を通してまちの駅が見附市にどのような影響を与えているのかをアンケート調査を通して明らかにしていく。



取組の成果と分析結果概要

- 「まちの駅ネットワークみつけ」の情報発信
学園祭でのパネル展や見附市『まちの駅&どまち春の物産フェア』においてパネル展を実施した。
- 見附市のまちの駅への「まちの駅の活動による影響調査」
(回収数 36 駅、回収率 97.3%)
 - 「まちの駅ネットワークみつけ」の施設形態は商業施設 66.7%、その他の施設 33.3%である。
 - 「まちの駅の活動を通して、地域への情報が伝わりやすくなったと思いませんか」という設問(問 15)に対して、商業施設では 83.3%が、その他の施設では 100%のまちの駅が「そう思う」「ややそう思う」と回答している。
 - 「まちの駅の活動を通して、観光客が増加したと思いませんか」という設問(問 18)に対して、商業施設、その他の施設ともに 41.6%が、「そう思う」「ややそう思う」と回答している。
 - アンケート全体を通して、「まちの駅」の活動が地域活性化に貢献していることが明らかとなった。

研究の枠組みと方法



平成 24 年度活動報告

グラスルーツグローバルイゼーション
—草の根・地域からの地球一体化推進—



◆担当教員
広田秀樹 教授

■ゼミ学生
4年生 : 吉原義和・伊丹彰・内山慎也・佐藤友晴・大屋翔馬・松沢知生・小川原玄
3年生 : 王偉志・松川貴之・李又輝・鹿又幸太

グラスルーツグローバルイゼーション

急速に進展するグローバルイゼーションの中で、草の根・地域からグローバルイゼーションを平和的に進めたいというゼミ生は、Grass-roots Globalization : グラスルーツグローバルイゼーション (草の根・地域からの地球一体化推進) というコンセプトを考案し活動を展開してきた。

伝統的に確立した
グラスルーツグローバルイゼーションの手法と活動

各地域で国際交流・人間交流は
活発化している！

長岡市

・アメリカのフォートワース市・ホノルル市等と、姉妹都市関係にあり交流。

見附市

・ベトナムのダナン市の方と交流。

小千谷市

・多くの市民の方がアメリカのオレゴン市の方と交流。

燕市

・アメリカのシェポイガン市と姉妹都市関係にあり交流。

★新潟県・全国・世界の多くの地域は既に、独自の国際交流・人間交流を進めている。

- ① Study : グローバルイゼーションに関する学習
- ② Invite : 外国人の方等をゼミに招待し対話・交流
- ③ Visit : 外国人の方が集まる場所等への訪問・交流
- ④ Donate : 学園祭に出店し利益をユニセフに寄附

Study: :
グローバルイゼーションについて学習



アメリカ人 David Boudreau 氏

Invite: :
ゼミに招待し対話・交流



ネパール人留学生ナミタ氏



国際交流センター長
羽智友信氏



ロシア人留学生
ロボワ・エリーナ氏



Visit :
「世界の仲間と運動会」に参加



Donate :
ユニセフの基金箱に寄附

平成 24 年度活動報告

バランス・スコアカードによる環境経営



◆担当教員

吉盛一郎 教授

■ゼミ学生名

3 年生 : 足達哲也 金澤和人 口紅宇 倉品岳 渡邊貴志 小林恵太
鈴木恵三 付新星 藤井理久 増田裕樹 吉川恭平 李園 李敏

取組みの目的

1. バランス・スコアカードについて文献研究を行って、企業、病院、学校等にバランス・スコアカードを用いた経営を提案する。
2. 地球環境問題が重視されている昨今、組織の経営理念に環境を意識した理念を文書化して環境方針として示し、実践することが、組織の存続に繋がると考える。

研究の意義

バランス・スコアカードによる環境経営について戦略マップとバランス・スコアカードを作成し、地域の各組織に提案する。こうした経営が地域の活性化に繋がると期待する。

バランス・スコアカードとは

- 1 従来、企業の業績評価は、短期的な財務の視点で分析していたが、この「財務の視点」に非財務的な長期的な視点として、「顧客の視点」、「内部プロセスの視点」そして「学習と成長の視点」を加えた。
- 2 この 4 つの視点で、組織の活動を総合的に評価し、組織の業績を評価するシステムである。

↓
組織の戦略と実行を結び付けるためのシステム、実行に移すためのシステムに進化する。

↓
組織の戦略の「見える化」システム



提案

1. SWOT によって自らの組織の環境を分析する。強み、弱み、機会、脅威の 4 つの基準で分析する。
2. SWOT 分析結果から組織の進むべき戦略を練る。
3. 組織の戦略と戦略テーマを考える。
4. 戦略マップとバランス・スコアカードを作成する。

作成方法

企業の SWOT 分析 (案)

- S(強み) → 都市圏に販売網
- W(弱み) → 多量の不良在庫、返品率増加傾向
- O(機会) → 顧客ニーズの多様化、環境配慮型製品への流れ
- T(脅威) → 海外製品、価格破壊

1) 企業経営の場合 (案)

- ・戦略 (範囲、優位性、目標)
高品質で安価な環境配慮型製品を、迅速に届けて 5 年以内に売上 × × 円を目指す。
- ・戦略テーマ
(1) 業務改善を推進し、返品率 × % を目指す
(2) 収益性を拡大し、売上高営業利益率 × × % を目指す
(3) 新事業分野 (環境配慮型製品) での社内シェアを × × % に高める
(4) 環境経営を目指す → 環境マネジメント (ISO14001) の構築と環境報告書を作成し公表する。

2) 病院経営の場合 (案)

- ・ビジョン
良質で満足度の高い医療サービスを実践し、市民の健康で文化的な社会の実現に貢献する。
- ・経営方針
環境報告書を作成し公表して市民から信頼され、支持される病院づくりを行う。

バランス・スコアカード

目標	尺度	目標値	アクションプラン
利益の増大	売上高営業利益率 総資本回転率	× × % × 回	(担当者 × ×)
返品率の低減	返品率	× %	品質検査監査の実施
新事業 (環境配慮型製品) のシェア向上	新事業分野成長率	前年比 × × % 増	予算 × × 円 (担当者 × ×)
注文後 24 時間内配送の徹底	注文・配送タイム	× 時間	発注・配送作業進捗の見える化
クレーム対応の超高速化	クレーム件数	全注文数 の × %	クレーム内容分析 (担当者 × ×)

平成 24 年度活動報告



セーフコミュニティの可能性
—いのちを大切にすまちづくり—

◆担当教員
菊池いづみ 教授

■ゼミ生 4年生 : 池亀紘貴 池田貴浩 袁 楽輝 小川成美 笠原由佑 齋藤拓也 高橋祐太
多田亮太 丸山夏樹 山崎翔子
3年生 : 斎藤郁美、菅原伸悟、高野憲和、高橋将貴、豊岡 文、前山倫世、山倉恵莉

取組みの目的

「セーフコミュニティ」とは、事故やけがは偶然に起きるものではなく予防できるという理念のもと、住民参加によって地域の人々が安全に暮らすことのできるまちづくりを進めるものである。本研究では、対象を長岡地域の一人暮らし高齢者に絞り、社会調査によって不慮の事故等による外傷の要因を究明し、いのちを大切にすまちづくりの実現に向けて、その可能性を探る。同時に「セーフコミュニティ」の普及啓発活動にも取り組む。

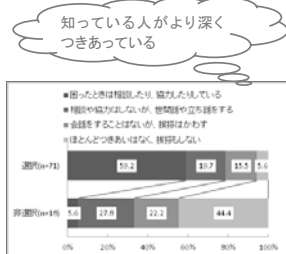
研究の意義

- 1 地域福祉の推進: 人びとの安心、安全な生活 → 長岡地域の活性化
- 2 波及効果: 社会保障費の抑制 → 市の財政負担の軽減

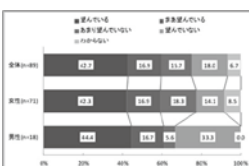
分析結果の紹介

◆近所づきあい

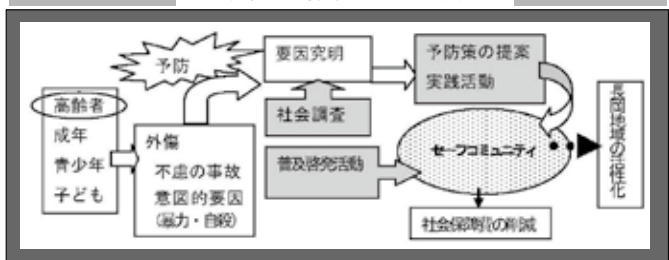
近所づきあいの程度と「近隣住民」が一人暮らしを知っているかとの関係



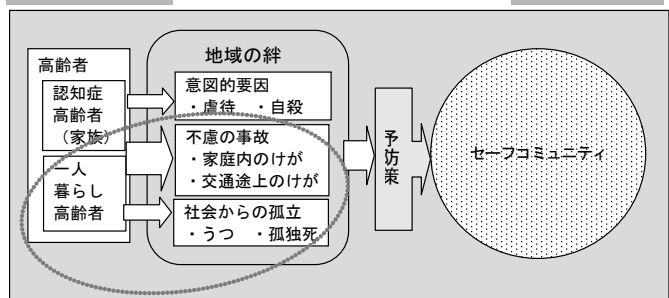
◆若者との地域交流



研究の枠組みと方法



調査の枠組み



調査の概要

- 【調査名】「高齢者(一人暮らし)の不慮の事故等に関する実態調査」
- 【調査目的】長岡地域の高齢者を対象として、家庭内や外出時の交通での不慮の事故によるけがや一人暮らしによる事故などの要因をつきとめ、予防策を探る。
- 【調査期間】2012年8月～10月
- 【調査対象者】長岡市在住のおおむね65歳以上の一人暮らしの方
- 【調査方法】(1)コミュニティセンターの会食参加者と(2)高齢者センターの来館者のうち、調査対象者に個別面接調査。
- 【調査項目】家庭内の事故について
外出時(交通)の事故について
近所づきあいと地域交流について
日常生活・孤独死の不安について
基本属性(性別、年齢、居住地域、住居形態、職業、健康状態)
- 【回収結果】有効回収数89票



提案:いのちを大切にすまちづくり

- ◆ **家庭内の事故:** [全般] 油断しやすい「庭」に注意/身体機能に合わせた日常の心がけ[男性] 過信せず余裕をもった行動を/家事経験の少ない「台所」「食卓周辺」に注意[女性]「台所」「食卓周辺」の整理整頓[一人暮らしへの配慮] 積極的なイベント参加や近隣住民との交流機会を増やす/いざという時の外部通報の環境整備をしておく。
- ◆ **外出時の事故:** [全般] 交通ルールを地域ぐるみで再確認[男性] なるべく公共交通機関を利用[女性] 休憩を入れて移動[一人暮らしであること] 日頃からの対策を習慣づける/仲間での外出機会を増やす。
- ◆ **近所づきあいと地域交流:** [全般] 地域のコミュニティ活動を活性化/世代間交流の機会を[男性] 地域のイベントに積極的に参加[女性] 若者との会話の場や相談の機会を[一人暮らしへの配慮] 信用しあえるような近隣住民との関係づくりの取り組みを増やす。
- ◆ **日常生活と孤独死の不安:** [全般] 一人暮らしを知っている近隣住民を増やす/訪問者が全くない人をなくす-住民主体のコミュニティを作る/趣味など夢中になれることをみつめる/信頼できる人や安心できる場所などの連絡先を必携[男性] 近隣住民との関わり訪問者を増やす [女性] 地域で気軽に集まれる場所に出向く/降雪期間の訪問者を増やす[一人暮らしへの配慮] 社会的ネットワークを形成する/寂しいと感じない生活環境に配慮する。

一歩、一歩いのちを大切にすまちづくりを実現
セーフコミュニティの可能性が広がっていく...

4つの実践活動



平成 24 年度活動報告



神谷の魅力発信による絆結び
—神谷の魅力を知り・伝え・つなげる—



◆担当教員 高橋治道 教授 ■ゼミ学生 4年生：畔上早樹 五十嵐秀也 斎藤美如 坂口智大 土橋里美
高橋治道 教授 鳥部健斗 南雲顕滋 丸山諒 山口祐貴
3年生：阿部亮太 上野晋也 大口昌之 高橋達郎 早川裕也

取組みの目的

長岡市神谷地区（旧越路町神谷地区）をモデルとして、地域に残る文化や歴史などの資産を守りながら地域の活性化を図る方策を試みる。今年度は、神谷の魅力に関わる史実を明らかにし、それらの魅力から新たな魅力を引き出し、他地域へのアピールと絆を結ぶことを目指した「地域の魅力発信による絆結び」活動を行う。

取組みの意義

神谷地域に残る歴史的建造物や伝統文化等の資産を生かした地域活性化策を考える中で、自分が生まれ育った地域を新たな視点で見つめなおし、地域コミュニティに参加して行く姿勢を学ぶことができる。

取組みの成果

- 神谷の地で新潟県初のチューリップを开花させた水島義郎に関する多くの資料を収集できた。しかし当初目的とした、水島義郎と小山重・小田喜平太との関わりを明らかにすることはできなかった。
- 「飲コミュニケーション」と現代若者気質との関係を明らかにし、神谷における若者層への働きかけの方策について提案できた。
- 新潟県チューリップ発祥の地としての神谷をアピールするためのチューリップ植栽と史実を伝える看板作りを行った。
- 小学生を対象とした「ほうきづくり教室」を開催し、神谷の伝統工芸になりつつある「ほうき作り」を体験させることができた。
- 「神谷情報マップ」を発展させた冊子を作り「e コミュニケーションプラットフォーム」活用の基礎を作ることができた。



活動の成果物

神谷が「新潟県チューリップ発祥の地」とであるという史実をご存知でない住民の方もいることから、この史実の形として神谷に再現することを目的に、チューリップの植栽を行った。また、史実を紹介する看板を作成した。



活動の枠組みと方法

ゼミの各メンバーが取り組むテーマを明確にすることにより作業効率を高めることができるのではないかと考え、各テーマに沿った3つのグループに分かれて、活動を行った。設定したテーマは、次の3つとした。

- ①「神谷の詳しい魅力研究」
- ②「神谷の魅力を創り引き出す」
- ③「神谷の魅力を他の場所へアピール」

このテーマに沿って3つの班を設定した。第1班は「神谷の詳しい魅力研究」を担当し、神谷地区にまつわる無形資産の文献調査やヒアリング調査を行い、内容をまとめる。第2班は「神谷の魅力を創り引き出す」を担当し、主に新しい企画や神谷が新潟県におけるチューリップの最初の開花地であることをアピールするためにチューリップの植栽と看板作りを行い、神谷地域を盛り上げる活動を行う。第3班は「神谷の魅力を他の場所へアピール」を担当し、コミュニケーションツールの作成や第1班と第2班の活動内容をまとめた小冊子を作成、配布することにより、神谷の知名度向上を図る活動を行う。

活動の概要

第1班

- ・チューリップに纏わる文献調査として、新潟県で初めてチューリップを开花させた神谷出身の水島義郎氏に関係する史実について、新潟県立植物園へのヒアリング、新潟県と新潟市への資料調査を行った。
- ・酒宴に対する神谷の歴史とお酒に対する現代若者の意識に関する資料調査とアンケート調査を行った。

第2班

- ・神谷の伝統工芸や歴史を子供たちに肌で感じて貰いたいと考え、「ほうき作り教室」を企画。
- ・神谷が「新潟県チューリップ発祥の地」であることを神谷の住民や他地域の人々に広めるために、チューリップの植栽とチューリップ発祥の地を紹介する看板作成を実施。

第3班

- ・「神谷情報マップ」を発展させた冊子の作成。
- ・e コミュニティプラットフォームを使った「神谷ご紹介」の取り組み。

その他

- ・どろんこ田植え、秋祭りカラオケ大会、神谷区民運動会、収穫祭などの各種行事への参加と神谷の人たちとの交流促進。



平成 24 年度活動報告

十分杯の広報活動



◆担当教員
権五景 准教授

■ゼミ学生
4年生：樋口拓磨 廣川拓実 永井文椰 小林建登 野口真義
井上翔平 近藤彰太 松永祐翼 吉田裕亮
3年生：宇尾野大樹 佐藤旭

取組みの目標

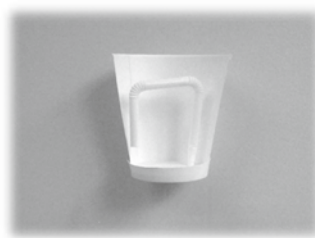
長岡ゆかりの十分杯の認知度を高めることで、十分杯やその教え（足るを知る）を地域社会に広げることが当面の目標として取り組んだ。長期的目標としては、十分杯をモチーフとした長岡土産を開発することで少しでも長岡の活性化につなげることを目標としている。

活動の意義

地域の由緒ある文化遺産であるが、知名度が低いため評価してもらえなかったものを地道な広報活動で認知度を高めたことが地域文化の再発見という意味において大きな意義がある。

主な広報活動

1. 長岡デザインフェア 2011 参加
2. 紙コップの十分杯製作
3. 十分杯ホームページ作成
4. アオーレ長岡での毎月の広報活動
5. 十分杯の認知度調査

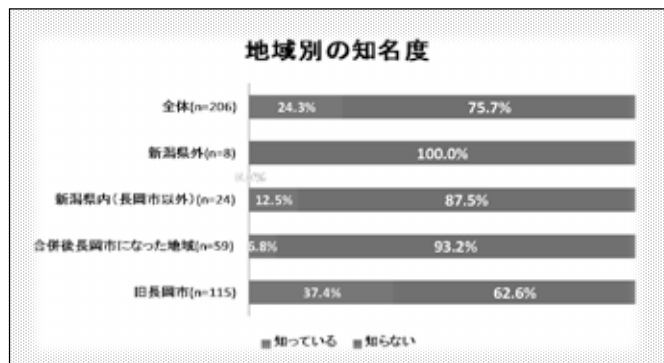


権ゼミオリジナルの紙コップ十分杯

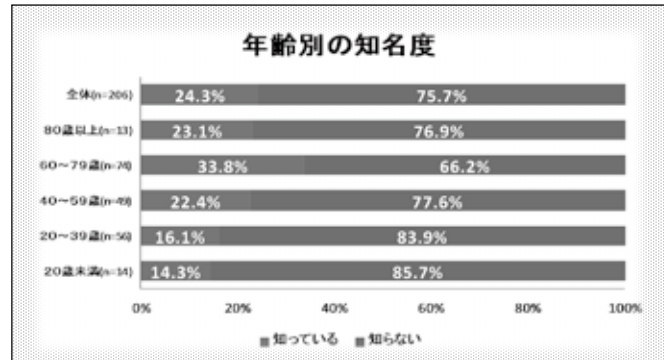
【広報活動写真】



認知度調査（地域別）



認知度調査（年齢別）



今後の目標

- ◇ 十分杯をモチーフとした長岡土産製作
- ◇ 十分杯めぐり観光コースの開発
- ◇ 十分杯コンクールの開催
- ◇ 十分杯ゆるキャラの製作

ゆるキャラ



のぼり



ホームページ





平成24年度 活動報告 企業の情報発信とホームページの役割

◆ゼミ教員

村山光博 准教授

■ゼミ学生

4年生：王逸飛, 小林拓斗, 高橋健, 高橋新二, 陳夢洋, 長津貴幸, 西山大輝, 彭晶晶, 堀賢人
3年生：袁苗, 小田優, 胡礼橋, 関匠, 深澤修三, 山口真代, 山本心美, 叶静

取組の目的

- 企業の情報発信の一つの手段としてのホームページの役割を検討する。
- 企業が自社ホームページで発信している情報がターゲットに向けた適切な内容であるか、また情報を効果的に伝える仕組みになっているかを調査し、改善案を策定する。
- 企業ホームページを改善することにより、地域企業の特徴や強みをPRする。

平成24年度 取組の流れ

①NAZE 会員企業へのアンケート調査

NPO 法人長岡産業活性化協会 NAZE 会員企業 74 社対象 / 28 件回収

②ホームページ改善支援の対象企業決定

アンケート調査の結果から、ホームページ改善支援の対象として4社を決定
(株)小西鍍金, (株)大菱計器製作所, (株)七里商店, (株)ソリマチ技研

③企業ヒアリングと工場見学

(株)小西鍍金, (株)大菱計器製作所, (株)七里商店, (株)ソリマチ技研

④企業のホームページ診断と改善案の策定

・HP診断と改善案：(株)大菱計器製作所, (株)七里商店, (株)ソリマチ技研
・ページデザイン案：(株)小西鍍金

⑤ 改善提案

企業ヒアリングと工場見学の様子

(株)小西鍍金



(株)大菱計器製作所



(株)七里商店



(株)ソリマチ技研

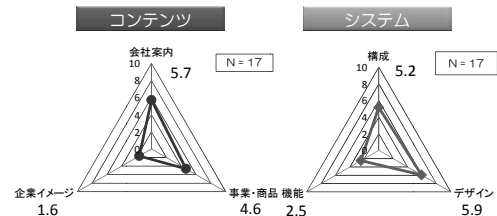


改善提案 1 株式会社大菱計器製作所

1. 現在のトップページ



2. ホームページ診断の結果(平均値)



3. 改善を期待する点

- 経営理念を明記したほうが良い。
- 新着情報が「商品紹介」のページの下にあってわかりにくいので、トップページに掲載したほうが良い。
- 問い合わせ先の担当者名や問い合わせ方法を明記したほうが良い。
- 作業風景や当社の優れた技術を伝えるページを設置したほうが良い。
- 社員の紹介やコメントなどを掲載したほうが良い。
- 社内の教育制度についてある程度紹介したほうが良い。
- メニュー構成がわかりにくく、現在アクセスしているページがサイト内でどの位置にあるかわからなくなるので、パンくずリストなどを利用して明示したほうが良い。
- 文字サイズがバラバラなので、要素ごとに統一するように配慮したほうが良い。
- 文字サイズ変更ボタンを設置してはどうか。
- 段落わけや見出しを工夫したほうが良い。
- 商品以外の情報もキーワード検索できるようにしたほうが良い。
- 日本語のページでも左側に英語の文章が表示されているが、日本語のページは日本語のみで表記したほうが良い。
- どのページからでも英語と日本語を切り替えられるようにしたほうが良い。

(順序不同)



平成24年度 活動報告

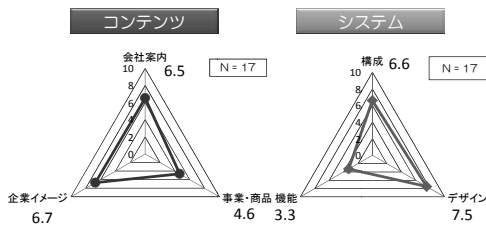
企業の情報発信とホームページの役割

改善提案2 株式会社七里商店

1. 現在のトップページ



2. ホームページ診断の結果（平均値）



3. 改善を期待する点

- トップページで自社の業務がわかるように表現を工夫したほうが良い。
- 会社案内では代表者の顔写真とメッセージを掲載したほうが良い。
- 自社の業務内容をもう少しわかりやすく説明したほうが良い。
- 自社の強みをより具体的に表現したほうが良い。
- 取扱商品のページでは商品分類について少し説明を加えたほうが良い。
- トップページにある花火関連のバナーを「ちょっと一息」に移動し、空いたスペースに業務に関連した情報を掲載したほうが良い。
- 社員の紹介やコメントを少し出したほうが、さらに親しみを感じられる。
- 「アルバム」のページに掲載されている写真を一つのページにまとめず少し分散させて配置したほうが良い。
- 問い合わせの多い項目をFAQなどでまとめてはどうか。
- サイトマップを設置したほうが良い。
- 取扱商品のページではハイパーリンクが多いので、閲覧済みのハイパーリンクの色が変わるようにしてほしい。
- 文字サイズを変えるボタンを設置したほうが良い。
- サイト内検索窓を配置したほうが良い。

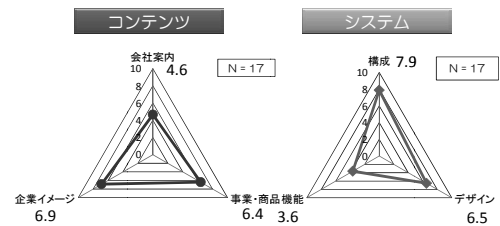
(順序不同)

改善提案3 株式会社ソリマチ技研

1. 現在のホームページ



2. ホームページ診断の結果（平均値）



3. 改善を期待する点

- トップページを見ただけでは会社の業務内容がわからないので、何をやる企業であるかを中心に表現したほうが良い。
- 会社情報では沿革、売上高、従業員数などもできれば記載したほうが良い。
- 会社情報として代表者の顔写真を掲載したほうが良い。
- 営業担当者など社員の顔写真を掲載したほうが良い。
- 製品情報ではPDFファイルのダウンロードだけでなく、ページ上でも簡単な説明を加えたほうが良い。
- 製品の導入事例の掲載を増やしてさらに信頼度を高めてはどうか。
- 専門用語が多いので、一般の人でも多少理解できるように少し用語の説明も加えてはどうか。
- 社内の教育制度などがあれば記載されたほうが良い。
- 社員の仕事の様子などを記載されたほうが良い。
- トップページに表示されている新着情報の数が多すぎるように感じるので、過去のものは別のページに整理したほうが良い。
- ページ内が文字だけになりがちなので、適度に画像を入れたほうが良い。
- お問い合わせのページで問い合わせ用のフォームを設置したほうが良い。
- サイト内の検索窓を配置してほしい。
- 文字が小さく見づらいところがあるので、文字サイズ変更ボタンなどを設置してほしい

(順序不同)

長岡大学

学生による 地域活性化プログラム

平成24年度 成果発表会

プログラム

- ◆鯉江 康正ゼミ：「まちの駅ネットワークみつけ」の情報発信と地域への影響調査
- ◆広田 秀樹ゼミ：グラスルーツグローバリゼーション—草の根・地域からの地球一体化推進—
- ◆吉盛 一郎ゼミ：バランス・スコアカードによる環境経営
- ◆菊池いづみゼミ：セーフコミュニティの可能性—いのちを大切にするまちづくり—

～ 休憩 ～

- ◆高橋 治道ゼミ：地域の魅力発信による絆結び—神谷の魅力を知り・伝え・つなげる—
- ◆權 五景ゼミ：十分杯の広報活動
- ◆村山 光博ゼミ：企業の情報発信とホームページの役割

総評 長岡市市長政策室政策企画課長 渡辺 則道氏
株式会社品川鑄造代表取締役社長 品川 十英氏

日時 平成25年 2月16日(土)
13:00～16:30(12:30受付開始)

会場 ホテルニューオータニ長岡
「NCホール」

定員 250名 入場無料

※申込順に受け付け。定員になり次第締め切ります。

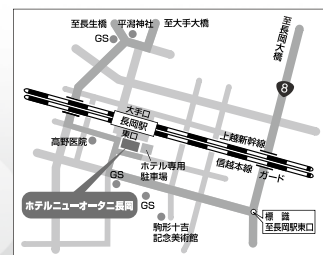
申込締切/2月8日(金)



- ◆主催/長岡大学
- ◆後援/長岡市・長岡市教育委員会・長岡商工会議所・財団法人いがた産業創造機構
NPO法人 長岡産業活性化協会NAZE

お申し込み・お問合せ

長岡大学地域研究センター 地域活性化プログラム (担当: 山田)
〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8
TEL:0258-39-1600 FAX:0258-39-9566
<http://www.nagaokauniv.ac.jp> E-mail:yamada@nagaokauniv.ac.jp



※ホテル及び周辺駐車場は有料駐車場のみです。
公共交通機関をご利用下さい。

学生による地域活性化プログラム
平成 24 年度 成果発表会

平成 25 年 2 月 16 日（土）、ホテルニューオータニ長岡 NC ホールにおいて、長岡大学生による地域活性化プログラム平成 24 年度成果発表会を実施いたしました。参加者は 173 名（地域連携アドバイザー 13 名、一般 42 名、本学教職員 30 名、学生 88 名）でした。

会場が学外ということもあり、学生は非常に緊張しておりました。11 月の中間発表会で指摘された改善点や意見を取り入れ、長岡地域の活性化をテーマに、7 取組が成果発表を行いました。地域連携アドバイザーから、反省点、実施できなかったこと、次年度に向けての方向性など、たくさんの質問や貴重なアドバイスをいただきました。このような活動を通じて学生の社会人基礎力は大幅に向上したと思われます。

また、総合アドバイザーからは、年々調査研究活動の水準は高まっており、今後とも継続的に活動されることを期待しておりますとの、お言葉をいただきました。次年度も引き続き学生による地域活性化プログラムを計画しており、学生が地域人として活躍できるものと期待しております。



<発表順>

- 鯉江 康正ゼミ : 「まちの駅ネットワークみつけ」の情報発信と地域への影響調査
- 広田 秀樹ゼミ : グラスルーツグローバリゼーション—草の根・地域からの地球一体化推進—
- 吉盛 一郎ゼミ : バランス・スコアカードによる環境経営
- 菊池いづみゼミ : セーフコミュニティの可能性—いのちを大切にすまちづくり—
- 高橋 治道ゼミ : 地域の魅力発信による絆結び—神谷の魅力を知り・伝え・つなげる—
- 権 五景ゼミ : 十分杯の広報活動
- 村山 光博ゼミ : 企業の情報発信とホームページの役割



学生による地域活性化プログラム平成24年度 成果発表会



- ① 鯉江 康正ゼミ : 「まちの駅ネットワークみつけ」の情報発信と地域への影響調査
- ② 広田 秀樹ゼミ : グラスルーツグローバルイゼーション
—草の根・地域からの地球一体化推進—



- ③ 吉盛 一郎ゼミ : バランス・スコアカードによる環境経営
- ④ 菊池いづみゼミ : セーフコミュニティの可能性—いのちを大切にすまちづくり—
- ⑤ 高橋 治道ゼミ : 地域の魅力発信による絆結び—神谷の魅力を知り・伝え・つなげる—



- ⑥ 権 五景ゼミ : 十分杯の広報活動
- ⑦ 村山 光博ゼミ : 企業の情報発信とホームページの役割



市長政策室政策企画課
課長 渡辺 則道 氏

最後に、総合アドバイザーから
総評をいただきました。
アドバイザーのみなさま、1年
間ありがとうございました。



株式会社品川鋳造
代表取締役社長 品川 十英 氏

学籍番号		学生氏名	
------	--	------	--

社会人基礎力診断シート（学生用）

本取組（地域活性化の取組）について、各質問の該当する番号に○をつけてください。

ア ク シ ョ ン	[主体性] あなたは、進んで取り組みましたか。 1. 進んで取り組んだ 2. あまり進んで取り組めなかった 3. 取り組めなかった
	[働きかけ力] あなたは、取組の実施にあたって他の人に働きかけましたか。 1. 積極的に働きかけた 2. あまり働きかけられなかった 3. ほとんど働きかけなかった
	[実行力] あなたは、取組を確実に実行できましたか 1. 確実に実行できた 2. あまり実行できなかった 3. ほとんど実行できなかった
	取組前と比較して、アクション力（主体性、働きかけ力、実行力）は、上昇したと思いませんか。 1. 上昇した 2. あまり上昇しなかった 3. ほとんど変化がなかった
シ ン キ ン グ	[課題発見力] あなたは、課題を明らかにできましたか。 1. 明らかにできた 2. あまり明らかにできなかった 3. ほとんど明らかにできなかった
	[計画力] あなたは、課題解決の準備ができましたか 1. 準備できた 2. あまり準備できなかった 3. ほとんど準備できなかった
	[創造力] あなたは、新しいアイデアを出せましたか。 1. 十分出せた 2. あまり出せなかった 3. ほとんど出せなかった
	取組前と比較して、シンキング力（課題発見力、計画力、創造力）は、上昇したと思いませんか。 1. 上昇した 2. あまり上昇しなかった 3. ほとんど変化がなかった
チ ー ム ワ ー ク	[発信力] あなたは、自分の意見を相手に伝えられましたか。 1. 十分伝えられた 2. あまり伝えられなかった 3. ほとんど伝えられなかった
	[傾聴力] あなたは、相手の意見を聞けましたか。 1. 十分聞けた 2. あまり聞けなかった 3. ほとんど聞けなかった
	[柔軟性] あなたは、意見の違いなどを理解しましたか。 1. 十分理解した 2. あまり理解しなかった 3. ほとんど理解しなかった
	[状況判断力] あなたは、周囲の人や物事との関係を良く理解しましたか。 1. 十分理解した 2. 一定に理解した 3. ほとんど理解しなかった
	[規律性] あなたは、ルールや約束を守りましたか。 1. 守った 2. あまり守れなかった
	[ストレスコントロール力] あなたは、ストレスをうまく解消できましたか。 1. うまく解消できた 2. あまり解消できなかった
	取組前と比較して、チームワーク力（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）は、上昇したと思いませんか。 1. 上昇した 2. あまり上昇しなかった 3. ほとんど変化がなかった

（資料）長岡大学「長岡地域若者キャリア育成事業報告書」（平成19年3月）をもとに作成

参考資料 4

学籍 番号		学生 氏名	
----------	--	----------	--

社会人基礎力診断シート（教員用）

本取組（地域活性化の取組）について、各質問の該当する番号に○をつけてください。

ア ク シ ョ ン	[主体性] この学生は、進んで取り組みましたか。 1. 進んで取り組んだ 2. あまり進んで取り組めなかった 3. 取り組めなかった
	[働きかけ力] この学生は、取組の実施にあたって他の人に働きかけましたか。 1. 積極的に働きかけた 2. あまり働きかけられなかった 3. ほとんど働きかけなかった
	[実行力] この学生は、取組を確実に実行できましたか 1. 確実に実行できた 2. あまり実行できなかった 3. ほとんど実行できなかった
	取組前と比較して、アクション力（主体性、働きかけ力、実行力）は、上昇したと思いませんか。 1. 上昇した 2. あまり上昇しなかった 3. ほとんど変化がなかった
シ ン キ ン グ	[課題発見力] この学生は、課題を明らかにできましたか。 1. 明らかにできた 2. あまり明らかにできなかった 3. ほとんど明らかにできなかった
	[計画力] この学生は、課題解決の準備ができましたか 1. 準備できた 2. あまり準備できなかった 3. ほとんど準備できなかった
	[創造力] この学生は、新しいアイデアを出せましたか。 1. 十分出せた 2. あまり出せなかった 3. ほとんど出せなかった
	取組前と比較して、シンキング力（課題発見力、計画力、創造力）は、上昇したと思いませんか。 1. 上昇した 2. あまり上昇しなかった 3. ほとんど変化がなかった
チ ー ム ワ ー ク	[発信力] この学生は、自分の意見を相手に伝えられましたか。 1. 十分伝えられた 2. あまり伝えられなかった 3. ほとんど伝えられなかった
	[傾聴力] この学生は、相手の意見を聞けましたか。 1. 十分聞けた 2. あまり聞けなかった 3. ほとんど聞けなかった
	[柔軟性] この学生は、意見の違いなどを理解しましたか。 1. 十分理解した 2. あまり理解しなかった 3. ほとんど理解しなかった
	[状況判断力] この学生は、周囲の人や物事との関係を良く理解しましたか。 1. 十分理解した 2. 一定に理解した 3. ほとんど理解しなかった
	[規律性] この学生は、ルールや約束を守りましたか。 1. 守った 2. あまり守れなかった
	[ストレスコントロール力] この学生は、ストレスをうまく解消できましたか。 1. うまく解消できた 2. あまり解消できなかった
	取組前と比較して、チームワーク力（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）は、上昇したと思いませんか。 1. 上昇した 2. あまり上昇しなかった 3. ほとんど変化がなかった

（資料）長岡大学「長岡地域若者キャリア育成事業報告書」（平成19年3月）をもとに作成

平成19年度～平成24年度 学生による地域活性化プログラム取組一覧

平成19年度 取組一覧

	19年度取組テーマ	ゼミ担当教員
1	長岡市の介護力の強化に向けて	石川 英樹 教授
2	学生観光客誘致方法の調査	伊吹 勇亮 新任講師
3	「ながおか」らしさの提言	岡野 宏昭 教授
4	「まちの駅長岡大学」の活性化に向けて	鯉江 康正 教授
5	障害者が変わる	鯉江 康正 教授
6	安全・安心・文化的なまちづくりプロジェクト	高橋 治道 教授
7	市内企業の「人材ニーズ」と求職者の「就労意識・能力」	平野 順子 准教授

平成20年度 取組一覧

	20年度取組テーマ	ゼミ担当
1	長岡の中心市街地活性化に向けて	石川 英樹 教授
2	長岡をより文化的な都市とするために	伊吹 勇亮 専任講師
3	長岡市民観光意識調査と長岡まつり大花火大会による観光戦略	岡野 宏昭 教授
4	「まちの駅」による地域活性化方策の検討	鯉江 康正 教授
5	若者の就労・自立支援を考える	兒嶋 俊郎 教授
6	ICT活用による安全・安心に向けた検討	高橋 治道 教授
7	若年者の雇用問題	平野 順子 准教授
8		菊池いづみ 准教授
9	浜松にあって長岡にないもの	権 五景 准教授
10	長岡市における特産品の東京市場販売計画	田邊 正 専任講師
11	環境負荷が軽減されたまつづくり	吉盛 一郎 教授

平成21年度 取組一覧

	21年度取組テーマ	ゼミ担当
1	市民のごみの減量とリサイクル事業の推進	石川 英樹 教授
2	長岡まつり大花火大会による地域活性化方策	岡野 宏昭 教授
3	ユニバーサル社会をめざして	菊池いづみ 准教授
4	強小企業城下町、長岡を目指す	権 五景 准教授
5	市民参加型地域づくりを考える	鯉江 康正 教授
6	地域コミュニティを中心とした安全・安心を考える	高橋 治道 教授
7	長岡市における特産品の東京市場販売計画	田邊 正 専任講師
8	環境負荷が軽減されたまつづくり	吉盛 一郎 教授
9	長岡市における先進的多民族共生社会の実現に向けて	広田 秀樹 教授
10	長岡周辺地域における健康管理と予防医療の現状	山川 智子 准教授

平成22年度 取組一覧

	22年度取組テーマ	ゼミ担当
1	長岡地域の在宅介護の現状と課題—家族介護者の負担を軽減するために—	菊池いづみ 准教授
2	①楽しもう！越後長岡「まちの駅」	鯉江 康正 教授
3	②出会いの街・ながおか カレンダー製作プロジェクト	鯉江 康正 教授
4	地域コミュニティ活性化による豊かで安全・安心な暮らしを考える	高橋 治道 教授
5	①中山間地における地域活性化の提案と実践	田邊 正 講師
6	②長岡市における特産品の東京市場販売計画：小国和紙、新潟ラーメン	田邊 正 講師
7	環境・リサイクル問題と取組みについて	原田 誠司 教授
8	企業の情報発信とホームページの役割（コンテンツ診断）	原田 誠司 教授
9	企業の情報発信とホームページの役割（システム診断）	村山 光博 准教授
10	グラスルーツグローバルイゼーション（草の根地球一体化）	広田 秀樹 教授
11	長岡周辺地域における健康管理と予防医療の現状	山川 智子 准教授
12	佐潟・福島潟・鳥屋野潟と地域との関わり・湿地の賢明な利用について	吉盛 一郎 教授

平成23年度 取組一覧

	23年度取組テーマ	ゼミ担当
1	セーフコミュニティへの出発 —いのちを大切にするまちづくり—	菊池いづみ 准教授
2	越後長岡まちの駅の情報発信と地域づくりへの意識変化の検証	鯉江 康正 教授
3	地域の資産を生かした絆づくり —地域の魅力再発見—	高橋 治道 教授
4	新潟県内企業における財務診断 —食料品業界二社による財務経営診断—	田邊 正 講師
5	企業の情報発信とホームページの役割 —コンテンツ診断—	原田 誠司 教授
6	グラスルーツグローバルイゼーション —草の根地球一体化—	広田 秀樹 教授
7	企業の情報発信とホームページの役割 —システム診断—	村山 光博 准教授
8	環境教育とエコツアーリズム —環境NPOの立ち上げとエコツアーから学ぶ—	吉盛 一郎 教授

平成24年度 取組一覧

	24年度取組テーマ	ゼミ担当
1	セーフコミュニティの可能性 —いのちを大切にするまちづくり—	菊池いづみ 教授
2	まちの駅ネットワークみつけ情報発信と地域への影響調査	鯉江 康正 教授
3	十分杯の広報活動	権 五景 准教授
4	地域の魅力発信による絆結び —神谷の地域を知り・伝え・つなげる—	高橋 治道 教授
5	グラスルーツグローバルイゼーション —草の根地球一体化—	広田 秀樹 教授
6	企業の情報発信とホームページの役割	村山 光博 准教授
7	バランスト・スコアカードによる環境経営	吉盛 一郎 教授

ブックレット既刊号のご案内

〈長岡大学ホームページ <http://www.nagaokauniv.ac.jp> でもご覧いただけます〉

- ① アタマは鍛えれば強くなる 原 陽一郎
- ② 授業評価の実態 -学生満足度の高い授業とは- 平野 順子
- ③ ニートとフリーター -揺れる若者の選択- 玄田 有史 兒嶋 俊郎
- ④ 2005長岡大学「起業家塾」 原 陽一郎 原田 誠司
- ⑦ 現代GPシリーズ1 情報力を鍛える -長岡大学における情報リテラシー・資格教育- 村山 光博
- ⑧ 現代GPシリーズ2 長岡大学教育プログラム
- ⑨ 現代GPシリーズ3 長岡大学教育プログラムⅡ
- ⑩ 現代GPシリーズ4 第3回 長岡大学文化講演会特集 第Ⅰ部 若者の社会人基礎力を鍛える -若者自立の教育を考える-
- ⑪ 現代GPシリーズ5 2006長岡大学「起業家塾」 原 陽一郎 原田 誠司
- ⑫ 夢をかなえる長岡大学の教育プログラム -平成19年度、環境経済学科・人間経営学科がスタート-
- ⑭ 長岡大学教育プログラムⅣ 学生公募型人間力育成プログラム -プロジェクト型自主活動とリーダー育成-
- ⑮ 長岡大学教育プログラムⅤ 長岡地域産業活性化のためのMOT教育 -イノベーション人材養成プログラム-
- ⑯ 現代GPシリーズ6 長岡大学教育プログラムⅥ 学生による地域活性化提案プログラム -政策対応型専門人材の育成-
- ⑰ 現代GPシリーズ7 いま、なぜ大学改革か …21世紀の新しい大学像は 原 陽一郎
- ⑱ 現代GPシリーズ8 第4回 長岡大学文化講演会特集 第Ⅰ部 脳科学と教育-21世紀の新しい教育を考える-
- ⑲ 現代GPシリーズ9 2007長岡大学「起業家塾」 原田 誠司
- ⑳ 現代GPシリーズ10 学生による地域活性化提案プログラム -政策対応型専門人材の育成- 平成19年度成果報告
- ㉑ 現代GPシリーズ11 情報力を鍛える -長岡大学における情報リテラシー・資格教育- 村山 光博
- ㉒ 現代GPシリーズ12 第5回 長岡大学文化講演会特集 若者の自立支援とキャリア教育 宮本みち子
- ㉓ 現代GPシリーズ13 学生による地域活性化提案プログラム -政策対応型専門人材の育成- 平成20年度成果報告(概要)
- ㉔ 「米百俵の精神」と長岡大学 原 陽一郎
- ㉕ 資格検定ガイドブック
- ㉖ 学生の3つの就職力一体形成支援プログラム
- ㉗ 現代GPシリーズ14 平成21年度地域活性化GPプログラム 学生による成果発表会(概要)
- ㉘ 現代GPシリーズ15 社会人基礎力育成グランプリ出場報告
- ㉙ 現代GPシリーズ16 学生による地域活性化提案プログラム 平成19年度～21年度活動報告(概要)
- ㉚ 長岡大学イノベーション人材養成講座 平成19～21年度成果報告書
- ㉛ 長岡大学のグローバルスタディ -21世紀の基盤精神「グローバルマインド」を身につける学習プログラム-
- ㉜ 大学とはどういうところか? -高校生の進路選択のために-プログラム- (2010年版)
- ㉝ 楽しもう! 越後長岡「まちの駅」 ~長岡大学鯉江ゼミナール 地域活性化への取り組み~
- ㉞ 長岡大学のキャリア教育 平成21～23年度「学生の3つの就職力一体形成支援プログラム」
- ㉟ 旧神谷信用組合を活用したコミュニティ活性化 (平成22年度) 高橋治道ゼミナール
- ㊱ 企業の情報発信とホームページの役割 (平成24年度) 村山光博ゼミナール
- ㊲ 長岡地域<創造人材>養成プログラム -「地域で役に立ち、頼りになる大学」をめざして-
- ㊳ 長岡大学茶道部 活動記録 (2012年度)

長岡大学ブックレット ㉔

【発行日】平成26年2月26日
【編集】長岡大学ブックレット編集委員会
【発行】長岡大学
〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8
TEL.0258(39)1600(代) FAX.0258(33)8792



長岡大学ブックレット